

はじめに

「ごはんできましたー」。可愛い声^{かわい}がインターフォンから聞こえてくる。「はい、行きまーす」と私は答えてコモンダイニングに下りて行く。小さな子たちは、食事ができたことを伝える呼び出しのお手伝いが大好きだ。食事を予約していた人たちが、ダイニングルームに三々五々集まってくる。それぞれ好きな席に座って食事が始まる。今日のメニューは、ピーマンの肉詰め、ポテトサラダ、味噌汁^{みそじる}、デザートはフルーツゼリー。仲良し同士で並んで食べる子、持参したビールをふるまう高齢の男性もいる。「コレクティブハウスかん森」の「コモンミール」という共同の食事の時間だ。

コレクティブハウスとは、それぞれのプライバシーが確保された、キッチン、お風呂付きの居住空間がありつつ、豊かな共用スペースの中でさまざまな年代が共同生活を送る住居形態のことだ。週に数回は一緒に食事をし、菜園作業や季節のイベントなどを楽しみ、

子育てや病気の時にはさりげない手助けもする。スウェーデンの働く女性たちが1960年代から運動を始め、1980年代になって実現した暮らし方だ。

私が住むコレクティブハウスかんかん森は、2026年で創立23年を迎えた。スウェーデンのコレクティブハウジングを日本に紹介し、日本での実現を呼び掛けたのは、日本女子大学家政学部住居学科教員だった故・小谷部育子さんなど、住まいを考える女性たちのグループだった。

スウェーデンのコレクティブハウスを取材した報告書は、カラフルな写真で魅力的な暮らしぶりを紹介していた。住まいにこだわりがあり、度重なる引っ越しとともに試行錯誤を繰り返していた私は、その冊子を見て小谷部さんたちのグループに即座に加わった。1988年のことだった。私はすでに50歳、仕事は順調でその頃は住まいも含め暮らしには十分満足していた。それでも私がコレクティブハウジングに心魅かれたのは、自分の目指していた住まいと暮らしがここにあると思ったからだった。

私の働き盛りは、ちょうど日本の高度成長期にあたる。企業で働く男性たちは企業戦士と呼ばれ、専業主婦が家事や育児を担う役割分業によって社会が成り立っていた。扶養家

族を持つ者は税金が優遇され、年金を含む社会保険料を妻は支払わなくてもよかった。妻の将来の年金を保証する、現在も続く第3号被保険者の制度は1986年に施行されたものだ。

すべての政策がサラリーマンの夫と専業主婦の妻に子ども2人の「標準世帯」を基準につくられていた。公営住宅も、育児も介護も世帯単位が当たり前の世の中だった。妊娠して保育園入園の相談に役所に行くと、「ご主人の収入で暮らしていけないですか、奥さんが仕事辞めて育てるんですね」と役所の職員は言った。母親の介護に来たヘルパーさんは、「お母さまがこんなに悪いのに娘さんが働きに出るんですか」と私を非難した。それぞれ、60年前、25年前のことだ。

しかし、それからの年月で働く女性は増え、保育園事情は飛躍的に変わり、介護保険が高齢者介護を支えている。家族の形も大きく変わり、東京では人口の50%が単身者だ。事実婚カップル、同性のカップル、シングルマザー、シングルファザーもいる。「標準世帯」は全く現実的ではなくなった。それでも、いわゆる「103万円の壁問題」は、社会保険料も税金の支払いも世帯単位のまま、その中で手取り収入を増やそうという政策によ

るものであるし、介護保険の訪問介護の報酬が2024年4月からあることか減額されるなど、またも家族介護に押し戻そうという動きもある。

都会のマンションで初めて子どもを持つ親は、相談する人もなく不安いっぱいだろう。単身者たちはワンルームマンションで近隣との付き合いなく暮らしている。一人暮らしの高齢者が孤独死するなども珍しくない。私がコレクティブハウスづくりの活動に参加した時、すでに自分の子育ては終わっていたし、高齢期にはまだ時間があつた。コレクティブハウスで子育てができたらどんなに良かっただろうと思つたし、高齢期をコレクティブハウスで暮らすのはどんなに楽しいだろうと想像もした。

しかし、私がコレクティブハウスをつくりたかつたのはそういった特定の目的ではなく、多世代で、一人暮らしもさまざまな家族形態の人たちもつながって暮らす住まい、血縁ではない人間関係を大事にする住まい、自立した人間たちがつながって暮らす住まい、標準世帯の常識を超えた住まいをつくりたいと思つたからだつた。スウェーデンのコレクティブハウスはそれを実現していた。早くに男女平等が進み、高福祉を実現していた北欧からの情報は住まいに限らず70年〜80年代にさまざま紹介されてきた。私自身も多くを学んだ。

現在のコレクティブハウスかんかん森には、1歳から88歳までの男女44人が大小ある28戸の住居に暮らしている。子育て真っ最中の共働き家庭、子どものいないカップル、シングルマザーと子ども、30代から高齢期前までの男女単身者とさまざまだ。

コレクティブハウスの暮らしが世間的常識と一番大きく違うところは、世帯単位でなく個人を単位としていることだろう。部屋ごとの家賃は別として、組合費、備品負担金といったお金は個人単位で支払う。コモンミールの調理当番、掃除当番もコミュニティ運営のための係活動も世帯ごとでなく個人単位だ。妻が調理当番をするから夫はしなくていいとか、ハウスマンテナンスは男の役割という性別分業はない。新しい入居者も見学会参加などでそのようなシステム、暮らし方を理解した人が入居する。

スウェーデンのコレクティブハウスに出会ってから日本での実現までに小谷部育子さんたちと一緒に10年余りの歳月をかけた。そして、実現から23年経^たたいまも、コレクティブハウスかんかん森は少しずつ変わりながら元気に成長を続けており、私にとって理想の住まいであり続けている。本書では、その詳細をお伝えしながら、コレクティブハウスが持つさらなる可能性と日本社会の住まいの課題を考えていきたい。

目次

はじめに

3

第一章 独立しながら多世代と暮らす

——コレクティブハウスという住まい

15

0歳から80代までがともに暮らす光景／

コレクティブハウスとシェアハウスの違い／

家賃の13%が共用スペースのための賃料／

ルーツはスウェーデンのユートピア社会主義思想／

日本での始まりは仲間集めから／最初は世田谷での実現を目指す／

荒川区での可能性を探る／コンセプトづくりと居住者集め／

高齢者施設、保育園の入るビルの一部がコレクティブハウスに／

最初の居住者たちの試み／「美しく暮らしたい」思いを食器、ソファに込める／
設立から続く家具什器の購入システム

第二章

ジェンダー平等、子ども天国、共同の食事

——コレクティブハウスの魅力

目指したのは標準世帯からの自由／单身居住者の割合と特徴／

入居にあたっての審査基準／女性居住者たちの経済力／

少子化に思う女性への大きすぎる負担／かんかん森の赤ちゃんたち／

自分の子育て時代にコレクティブハウスが欲しかった／

かんかん森の保育園問題／多世代コミュニティを守るための「子ども割引」／

居住者が月1回担当する食事づくり／食材のどこにこだわるか／

パンづくりと国産小麦粉へのこだわり／味噌づくりと餅つきも恒例イベント／

めっきり減った魚料理

第三章 多世代の住まいを維持するために

——試行錯誤のコレクティブハウス運営

メディアからの高い注目と居住者組合の中の株式会社／

居住者同士が連帯保証人に／株式会社コレクティブハウスの事業／

多世代コレクティブハウスを守るための株主総会／

運営メンバー引き継ぎという課題／最初の感染者は味噌づくりの翌日に／

自宅を出られない人への手助け／コモンミールや定例会は中止に／

少しずつコモンミールを再開する／東京に残るしかなかった年末年始／

居住者たちの暮らし方・働き方の変化／どう暮らすかは、どう生きるか

フェルドクネッペン——かんかん森がお手本にしたコレクティブハウス

かんかん森との長い交流／以前と変わったこと、新しく始まったこと／

コモンミール運営はサポーターが活躍

スードラストション——便利な街中にある現役世代のコレクティブハウス

賃貸住宅から分譲住宅へ／「もったいない」の精神をスウェーデンで見つけた／

描いてしまおう、子ども部屋の壁／
緩やかな暮らし、緩やかなコミュニケーション

第四章

コレクティブハウスで「老いる」ということ

じゅん子さんが亡くなった／コレクティブハウスで老いること／

高齢者も役割を負う必要があるのか？／

親族以外は最後まで付き添えないという課題

第五章

私の終の棲家はコレクティブハウス

紆余曲折の私の居住歴／「家族優先」だった高度成長期の団地／

団地での保育所づくり／放送局で提案した男性の育児時間／

共同保育所づくりはコレクティブハウス設立の原点／

TBS退社とテレビマンユニオンへの参加／都心で職住接近の恩恵を受ける／

決められた間取りへの違和感／私にとっての「家族の時代」の終わり／

特別対談

上野千鶴子×坂元良江

「かんかん森は本当に終の棲家になり得ますか？」

「老い」と「死」を現実的に考えた住まいとは？／

いまでも続くテレビマンユニオンとのつながり／

後輩も興味を持つコレクティブハウス／

88歳の現実／移り変わる連絡手段に戦々恐々／入居者を年齢で区切らない／

85歳でがんになる／病気からの解放と自由な生活／

住みたい人が参加してこそその住まい／共有・共用という豊かさ／

上野千鶴子さんとのお付き合い

「20年はこの場所を守ろう」と思っていた／

コミュニケーションの場としてのコモンミール／

「コモンスペースがある」だけではコミュニティは生まれない／

居住者の高齢化にどう対応するか／コレクティブハウスで最期を迎える／

次の世代へ引き継いでいく

資料 NPOコレクティブハウジング社

コーディネートのコレクティブハウス

おわりに

201

194